
桃色の恋

はっぴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃色の恋

【Nコード】

N4794B

【作者名】

はっぴ

【あらすじ】

新一と蘭は、まだたったの4才。昨日、保育園に入園したばかりで、お友達もいない。新一は、蘭の前に手を出した。2人は自分の手と手を重ね合わせて、ギュッと握った。2人の桃色の初恋の物語

★

2人はまだ、たった4才で

それでもやっぱり心はつながっていて

そんな2人の初恋の物語

昨日、〇〇保育園に入園した

組の名前は サクラ組

だいたい、20人位の少年少女がいる

そんな中に、1人で紙にクレヨンでお花の絵を描く女の子と

1人で車のおもちゃをブンブン走らせている男の子がいた

ほとんどの子は、2人や3人やそれ以上の人数で集まって遊んでいた

お互いに、知り合いで保育園に入った子が多いようだった

だけど、1人で紙にクレヨンでお花の絵を描く女の子、毛利 蘭と
1人で車のおもちゃをブンブン走らせている男の子、工藤 新一の
2人には

まだ友達がいなかった

他の子から、「一緒に遊ぼう」と声をかけられるわけでもなく、自
分から声をかけるわけでもない

ただ、まだ保育園に慣れていないだけ

ただ、まだ友達が出来ないだけ

たった、それだけ

工藤新一と毛利蘭が、1人で遊んでいることに気が付いた先生が寄
ってきた

工藤新一のほうに

「新一君、お友達できた？」

「……………」

「……………そうだ！先生がお友達に声かけてこようか？」

先生は、新一の顔をのぞきこんだ

「し、新一君?？」

「……………」

新一は何も言わずに、先生の目も見ずに、無表情で車を走らせる

先生はそつと新一のそばから離れていった

気を取り戻したように、そのまま方向転換して蘭のほうへ向かう

「蘭ちゃん」

「ん？」

蘭は、動かしていた手をピタッと止めて先生の顔を見た

「お友達とあそばないの？声かければ、お友達できるよ?。」

「うん」

蘭は少し顔を下に下げた

「先生が、声かけてこようか?。」

「い」

蘭は即答で答え、また手を動かし始めた

「そ、そう……分かったわ」

先生は、そつと蘭のそばから離れていった

先生がそばを離れていってから、蘭はそつとまわりをみわたす

すると、蘭の顔にはブルーの色が浮かぶ

そのまま、ジワジワ涙が浮かんできていた

「蘭も……お友達と遊びたい」

そう、小さく呟いた

すると、蘭の顔の前に自分と同じ位の小さな手が現れた

蘭はそつと顔を上げる

そこには、キラキラ輝く瞳を持った少年がいた

「え？」

「ん」

「何？」

「ん！」

蘭は、自分の前にいる少年が何をしたいのかが分からなかった

ただ、何を聞いても ん しか言わないのだ

「ん!」

新一は、蘭にずっと出していた手をもっと近づける

蘭は あっ… と呟くと、新一の手に自分の手を重ねた

そのままギュッと手を握る

そう、新一は手をつなげ、と言いたかったのだ

新一は蘭をグイッと引っ張って立たせる

「キャッ」

蘭は思わず声を上げた

そのまま新一は、グイグイと蘭を引っ張っていく

「ねえ、どこに行くの?」

「……………」

「ねえ!」

蘭の問いかけにはまったく答えず、新一はどんどん蘭を引っ張っていく

ついには 外 まで

そして、保育園の裏側に到着した

「ねえってばあ!!」

「しゅ!」

新一はクルツとらんの方を向き、口の前に人差し指をたてる

「そんな大声出すなよ、先生に見つかっちまうだろ……」

「え? う、うん」

こっち、と新一はまた蘭を引っ張っていく

大きな石の上に乗り、そこからまた大きな石に乗る

そして、新一は太くて丈夫そうな木の幹に手かける

「こ、こんなところに来ていいの?」

「……………」

「ねえ!! あっ……」

新一は、蘭と握っていた手をパッと離す

蘭はビクツとした

(どうしよう……嫌われちゃったかなあ)

そんな心配をする蘭をよそに、新一は太い幹に座って蘭に手を伸ばした

「え？」

蘭は新一の目を見てから、また新一の手に自分の手を重ねる

「気をつけろよ」

「うん」

キャツと言いながら、蘭も幹に手をかけて新一の隣にちょこんと座る

「なあ、見てみろよ………こっからの景色」

「え？」

蘭は真っ直ぐ前を見た

「そんなに高くないから、そこまで綺麗じゃないけど………なかなか良いだろ？」

「うん！とつても♪」

新一はホッと息をついた

（気に入ってくれて、良かった）

蘭は今も、景色を見つめている

色んなマンションが見える、家が見える、お店が見える

「スッゴイ！」

「だろお♪昨日、見つけたんだ」

新一は、ほっぺたをほんのり赤くさせた

「えっ？でも、昨日は入園式だったよ？」

「でも、見つけたの！」

「そっか♪」

蘭は笑う、可愛い笑顔でニッコリと

そんな蘭の顔を見て、新一もニッコリ笑った

「蘭と、お友達になろ？」

「えっ………」

新一は、ほっぺたをさっきまして赤く赤く、染めていた

「ダメ？」

「べ、別にいーよ」

蘭はまた、無邪気にニッコリと笑った

「やったあああああ♪」

「しっしっ」

蘭が大声を上げたため、新一が口の前に人差し指をたてた

「あっ！ゴメンね？」

蘭はほっぺたをピンク色に染めた

「あっそうだ！！名前、何て言うの？あたし、毛利蘭！蘭って呼んでネ」

「え、えっと……く、工藤新一」

新一は照れながら蘭に笑顔を見せた

「カッコイイ名前♪新一って呼んでいい？」

「い、いーよ」

蘭はキラキラと目を輝かせる

「宜しくね」

「あ、ああ宜しく」

2人はニツコリ微笑んだ

新一は、ほっぺたを苺のように赤く染めながら

蘭は、ほっぺたを桃のようにピンク色に染めながら

そんな時、後ろから聞き覚えのある声がする

「コラッ！そんなところに登ったら危ないでしょ！それに、保育園の裏側には来ちゃダメよ」

2人はゆっくりと後ろに振り向いた

腰に手ほ当てながら、先生が新一と蘭を見上げている

「や、ヤベーな」

「ど、どうするの？新一い」

「ど、どうするって言われても………」

そんなことを言っている間に、先生がすぐ近くまで来ていた

先生は、大きな石に乗る

先生の背の高さなら、そこから軽々と2人を見ることが出来る

「降・り・て・き・な・さ・い」

「は、はぁい」

新一と蘭は、手ほをつないでゆつくりと来幹から降りる

その後、2人が先生に怒られたことは、言うまでもない

でも、それから2人は仲良くなった

保育園では、いつも兄弟のように仲良く遊んでいた

砂場で遊んだり、三輪車に乗ったり、遊具で遊んだり

時にはまた、保育園の裏側のあの太い丈夫そうな木の幹にちょこんと座りに行ったり

どこに遊びに行く時も、必ず忘れずにやっていたことが2人にはあった

それは

お互いの手と手を重ね合わせて、手をつなぐこと

2人の桃色の恋は、ここから始まった

（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！！

少し、分かりづらい部分があったと思います。

視点が良く分からなかったのではないのでしょうか？

ここは蘭？こっちは新一？ここは誰の視点？とか……

つくづく、自分の文章力が低いと感じます！！

私もまだ学生なので、文章力がダメダメですが、どうか、今後も宜しく願います！！

評価&感想も、宜しく願います★

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4794b/>

桃色の恋

2010年10月9日15時13分発行